

城原川だより 63号 城原川を考える会

【ダムに拠らない治水をめざすには】

H27. 6. 18(木)

次回発行予定 H27 7月15日



城原川ダム「検討の場」開かる！

5月18日城原川ダム「検討の場」が開かれました。

今回の検討の場を傍聴して、国の発表した資料と、それに対する県や佐賀市、神埼市の反応にいくつかの違和感を覚えました。その中のいくつかをご紹介します。

その一つは、治水安全度についての各自治体の無反応さです。

過去二回行われた検討の場準備会で示された治水安全度は、いままで言われて来た治水安全度1/150、基本高水690^m³/秒ではなく、治水安全度1/50、基本高水540^m³/秒でした。これに対して、県も佐賀市も神埼市も、「安全度をさげること、690^m³/秒との整合性の説明が曖昧」として反発していたはずですが、ところが、今回の検討の場ではそのことを問題にする自治体はなく、前回690^m³/秒を下回る安全度は納得できない、と強く抗議していた神埼市でさえそのことに触れることはありませんでした。また、流水型ダムというダムの形態についても何の異議もありませんでした。(水がいない、ということで傍聴席の県のOBの方々はザワついていらっしやいましたが)

城原川の安全安心のために、早期に丁寧に治水方針が決定することが大切、としながら、出された治水方針に、どの自治体も根本的なものには触れず、「**早期に**」ということだけに前のめりになっていました。

そして、「様々な県民の意見に対応して欲しい(知事)」という要望にたいして、国は「パブリックコメント等、丁寧に検証をすすめたい」と回答しました。そのパブリックコメントは、この検討の場開催日の翌日5月19日から1ヶ月間実施するとあります。流域の人達はほとんどこのことを知りません。つまり何にたいして丁寧なのか不明です。中身の問題ではなく、やりましたよという実績づくりを丁寧に行うということなのでしょうか。有識者会議に諮った時、検討漏れとなってもどされないように丁寧に、としか理解できませんでした。

また、ダムにかかる経費も明らかにされていません。

6月17日考える会のパブリックコメントを出しました

考える会でもパブリックコメントを提出しました。内容は19ページにも及ぶものでしたので、城原川だよりには載せられず別刷りにしました。別刷りをご覧ください。

筑後河川事務所佐賀庁舎訪問

5月29日と6月11日の2回に渡って、私たちは筑後川河川事務所佐賀庁舎に出向き、担当者の方々に面会し、私たちの考える「流域治水」をお伝えし、検討の場に出された資料についての疑問点等を答えていただきました。

その中で確実に分かったことは、河川整備は1/50の540^m³/秒でおこない、ダムは690^m³/秒で行うという方針をとっているということです。このことは準備会ですでに了解されていることとして検討の場では説明を進めました、ということでした。

ダム案は流水型ダム(重力式コンクリートダム)

この形のダムは人為的なコントロールが出来ない為、流木や石などで穴が塞がった場合、下流にとって脅威となります。また生態系への影響も大きいと思われます。

地元では「穴あきダムでは観光にもならない。どうせ作るなら溜水型ダムが欲しい」という声がダム推進の方々から多く聞かれていました。土砂を流すため環境によいといううたい文句で登場した流水型ダムでしたが、実際は大きな穴から噴出する水をそのまま河川に流せない為、おおきなコンクリートの水受けがダム下流につくられ、ダム本体の場所は水が無い時にはイノシシや、今問題のアライグマなど害獣の生息場所になるだろうと予測されています。また、上流にはダムに流れ込む巨石を防ぐための様々なコンクリートの土留めのようなものも必要でしょう。効果が小さい割には環境の激変が考えられます。脊振地区には、よほどの対策をしないと、今後この地区の衰退は避けられないでしょう。

流水型ダムは新しいタイプのダムである為、参考例がほとんどなく、ある意味城原川ダムは日本の流水型ダムの実験的なものになるのではと危惧します。

従来計画されていたダムの治水容量は **650万^{m³}+堆砂容量170万^{m³}** でしたが、今回発表されたダムの治水容量はわずか**350万^{m³}**です。穴あきダムですから、どれくらいの穴になるのかはまだ発表されていません、690^{m³}/秒対応のダムということですから、ずいぶん大きなものになることでしょう。

私たちは当初検討の場の資料を見て次のように分析していました。

川の流下能力は330^{m³}/秒だから、

540^{m³}/秒-330^{m³}/秒=**210^{m³}/秒**の調節をダムで行うか河川や流域を中心とした方法でやるか、という事になり、ダムをつくとすれば、わずか210^{m³}/秒の処理の為のダムとなる。

かつて野越等で120^{m³}/秒の処理が計画されていたことを考えると、残り90^{m³}/秒の処理さえできればそんな小さなダムはいらないといえる。

城原川の国管理区間はHWLが県管理の時代に比べて1m下げられているので、これをもとに戻せば数字上では60~120^{m³}/秒の処理はできると考える。つまり、ダムはいらない。しかし、それは数字上のことだから、河川整備をしっかりとしなければならない。

実際H21年7月には430^{m³}/秒もの流量が流れ下ったという実績がある。その時は、河川の整備が遅れて手つかずの軟弱土手が多い中胆を冷やしたが、城原川は立派に耐えきって私たちを守ってくれた。野越等からの越流はわずか20^{m³}/秒。破堤させない為の河川整備に力を注ぐことが大事。

そう考えていました。

しかし、根本的に見逃していたことがありました。それが、城原川の330^{m³}/秒という流下能力です。

私たちは「330^{m³}/秒が城原川の流下能力です」、と言われてそのまま鵜呑みにしていました。しかし、考えてみると、430^{m³}/秒も流れたことも実際あったのです。

今回は城原川の流下能力を過小評価しているのではないか？という疑問について考えてみたいと思います。

山口知事に面会要請

山口知事に面会を次のような主旨で申し込んでいました。

私たち「城原川を考える会」は、城原川流域委員会終了後のH15年12月に、有志が集まり話し合いを持って、翌16年2月に発足した会です。本当にダム案が最良のものか、という疑問の中、地元の聞き取り調査をはじめ、専門講師を招いての勉強会、資料の調査、分析など多方面にわたった活動を行ってきました。

その上で、この流域が持つ特性とそれに合う治水方法は、ダムではないとの確信を得ました。それは流域治水というものですが、この実現のためには地域の合意形成が不可欠となり、そのことについて河川管理者は「それが出来れば素晴らしいが、各省にまたがる壮大なスケールの事業になる」と二の足を踏むようすでした。しかし、この地域には「持たせ合う」という水文化がまだ色濃く残っており、そのことを大切にしている人々もまた残っています。合意形成の難しさはありますが、かといって簡単に宝を手離してもいいものかと危惧するところです。

私たちはこれが出来れば、この地は水問題の新たな方法の実践流域として世界遺産にも匹敵する場所になると信じております。

それらのことをご理解いただきたく面会をお願いした次第です。

以上

と言う文書を送りました。7月24日にお会いすることができるようになりました。

月曜勉強会（祝祭日を除く月曜日） 10:00～11:30 千代田町福祉センター
気軽にのぞいてみてください。いつも3～4人の参加です。

第77回定例会6月18日 14:00～16:00 千代田町福祉センター

第78回定例会7月15日 14:00～16:00 神埼中央公民館

代表 佐藤 悦子 〒842-0056 神崎市千代田町境原282-12
電話 0952-44-2925

副代表 平田憲一 〒842-0122 神崎市神埼町城原1877-1
電話 0952-52-2827

Mail : teaho74@yahoo.co.jp

ブログ ふるさとの川城原川 livedoor.jp/ jyubarugawa

メールまたは、上記各連絡先へ、ご意見、疑問、質問、反論、どしどしお寄せください。

文責 佐藤悦子